

2025.9.14 (日) 使徒26:9~18

26:9 実は私自身も、ナザレ人イエスの名に対して、徹底して反対すべきであると考えていました。

26:10 そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を受けた私は、多くの聖徒たちを牢に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の票を投じました。

26:11 そして、すべての会堂で、何度も彼らに罰を科し、御名を汚すことばを無理やり言わせ、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには国外の町々にまで彼らを迫害して行きました。

26:12 このような次第で、私は祭司長たちから権限と委任を受けてダマスコへ向かいましたが、

26:13 その途中のこと、王様、真昼に私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と私に同行していた者たちの周りを照らしました。

26:14 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき私は、ヘブル語で自分に語りかける声を聞きました。『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。』

26:15 私が『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、主はこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』

26:16 起き上がって自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たことや、わたしがあなたに示そうとしていることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。

26:17 わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのところに遣わす。

26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンへの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。』

<説教>

使徒パウロはカイサリアでアグリッパ王（ヘロデ・アグリッパ2世）や総督フェストゥスの前で弁明しています。パウロはこの時が、「〈王や総督たちの前に引き出〉された自分がイエス・キリストの〈証しをする機会とな〉る」（cf.ルカ 21:12-13）ことを〈幸いに思い〉（使徒 26:2）、神に感謝していました。

パウロは自分の先祖たちに神が与えてくださっていた約束に、またユダヤ人たちが今も熱心に神に仕えながら得たいと望んでいる約束に望みを抱いているがために自分はユダヤ人たちから訴えられていると言いました(6-7)。そしてこの神の約束の内容とは〈神が死者をよみがえらせるということ〉(8)だと弁明したのです。パウロがこの後すぐに続けて証しするように、よみがえりの生ける主イエス・キリストがパウロに実際に現れてくださり、イエスを信じる信仰とイエスの福音を宣べ伝える使命を与えてくださいました。パウロは、「神によってよみがえらされたイエスこそ、自分たちユダヤ人たちが神の約束として夜も昼も熱心に神に仕えながら待ち望んで来たキリスト、救い主である。このイエスこそ神の約束の成就である。」と知り、信じました。ですから、「神が死者をよみがえらせ

るといことが、ユダヤ人に与えられた神の約束、望みである」というパウロの主張の根拠はイエスのよみがえりでした。神は死者のよみがえり（殊に、神のさばきを受けて滅びることのない永遠のいのちを持ったよみがえり）を、イエスのよみがえりによって明らかにお示めしになりました。主イエス・キリストは、〈死者の中からの復活により、力ある神の御子として公に示された方〉（ローマ 1:4）です。主イエス・キリストを信じる者たちの初穂、先駆けとしてイエスは死者の中からよみがえられました（cf. I コリント 15:20）。私たちの背きの罪のゆえに十字架で死なれた主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです（cf.ローマ 4:23-24）。このように、主イエス・キリストが私たちのため十字架で死なれ、そしてよみがえられたことをパウロは信じ、人々に宣べ伝えたのです。アグリッパ王の前でも、このイエスによって実現された神の約束を〈なぜ信じがたいこととお考えになるのでしょうか〉（26:8）と迫るのです。

しかし、そう言うパウロ自身が、実はかつてはそんな信仰を持っていなかったのであり、ただ神の、主イエス・キリストからの一方的なあわれみ、恵みによって信仰を与えられ、使命を与えられたのだと証しするのです（9節以下）。

パウロもかつてはナザレ人イエスの死者からの復活について徹底的に否定していました（9）。〈ナザレ人イエスの名〉とは、ここでは「イエスの復活」即ち「神が死者イエスをよみがえらせた」ということと同じことです。

自分たちユダヤ人が「神冒瀆者」として罪に定めて殺したナザレ人イエスの復活を頑として信じることなく〈徹底的に反対すべきであると考えてい〉たパウロは、その考えに基づく行動もまた徹底的に〈実行〉しました（10-11）。さらっと言っているようですが（もちろんそんなことはなく、赦されたとは言え、自分では一生忘れてはならない、消すことのできない自らの罪として思い起こして言っているわけですが）、「すごい」としか言いようのない行動でした。さしずめ、神社参拝強制や戦争に反対する人々への迫害、日の丸・君が代強制に抵抗する人々への迫害といったところでしょう。パウロはそうすることが、ユダヤ教徒として当然のこと、自分に与えられた神からの使命だと信じ切っていたのです。

そんなパウロは、イエスとその復活を信じないユダヤ人たちから絶大な信用を得ており、一層の迫害を託され、〈祭司長たちから権限と委任を受けてダマスコへ向かいました〉（12）。しかし、ここで復活の生ける主イエス・キリストが現れてくださり、パウロをまず「打ち倒し」、その後「立たせ」てくださいました。そのことを証しました（13-18）。「とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い」との主のことば（14）がここで初めて明かされます。農夫が牛に鋤（すき）を付けて畑を耕すとき、牛がときに立ち止まったり、あらぬ方向に進もうとすることがあるので、農夫は片手で鋤を持って操縦しながら、もう片方の手に持った2～3メートルほどの「とげの付いた棒」で牛を叩いて農夫が決めた方向に行かせるということだったそうです。牛はそれを嫌い、反抗してその棒を蹴り返します。しかしそれで牛は「痛い」思いをするだけで、結局はどんなに反抗しても農夫に従うほかありませんでした。パウロはイエスを信じる〈聖徒たち〉を迫害していた（蹴っていた）のですが、実は復活の生けるイエスを蹴っていたことが明らかにされました（14-15）。そして〈痛い〉思いをしながら〈とげの付いた棒〉を蹴っていたパウロもついに主が予めパウロに対してご計画しておられた方向へと向かうほか道がなくなりました。とげの付いた棒を「蹴っても、無駄」（欄外注）だったことが明らかになりました。復活の生ける主

イエス・キリストに徹底的に強硬に敵対し、反抗し、キリスト者たちを迫害してきたことが本当に愚かで罪深いことだとやっと分かりました。主がそう教えてくださいました。

「起き上がって自分の足で立ちなさい」(16)とは昔の預言者が神から使命を与えられたときみことばと似ています(cf.エゼキエル 2:1)。パウロを打ち倒した主イエスはその後、パウロを再び立たせてくださり、主イエスの〈奉仕者、また証人に任命〉し、新たな使命を与えてくださいました(16-18)。それはユダヤ人と異邦人、即ち全ての人々に主イエスによって遣わされて行き、主イエスの福音を宣べ伝えることでした。パウロを〈この民と異邦人の中から救い出し、彼らのところに遣わ〉しなされる主が、続けてパウロを用い、パウロと共にいてくださり、働いてくださいます。そうやって主のみことばと聖霊の力によって〈彼らの目を開いて〉、イエス・キリストにおいて神と神の愛を見、知るようになっています。〈闇から光に〉、手探りで進むべき道が分からない状態から主イエスの後に従う道に招き入れてくださいます。〈サタンの支配から神に立ち返らせ〉、かつては罪と悪魔の支配下に奴隷だった者を神のみもとに帰らせ、神のしもべとして神に仕え、神の栄光を現す人生にしてくださいます。〈わたし(主イエス・キリスト)を信じる信仰〉を与え、〈彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかる〉ようにしてくださいます。そのように、主イエスのために、主イエス・キリストにある神の愛、あわれみ、恵みを証しする使命をパウロは主から受けました。

私たちにもまた、自らが蹴り、痛みを覚えている〈とげの付いた棒〉があるかもしれません。それが何であるか明らかにしてくださるよう、主のあわれみを乞い願います。また私たちにも、主がパウロにしてくださったように〈天からの光〉を見せてくださり、照らしてくださり、〈地に倒れ〉るそんな必要がなおあるかもしれません。主がそのようにしてくださいますように。そしてその後に再び、主の力で、主のみことばと聖霊の力によって〈自分の足で〉立たせてくださいますように。そして、その足でこの罪の世に出て行って、主によって遣わされて行って、主イエスを証しし、福音を宣べ伝えて行くように、主イエス・キリストの御名によって祈ります。